



恋の一步は

H

から

紫馬 結香莉の場合



紫馬 結香莉の場合

登場人物

しば ゆかり
紫馬 結香莉

- ・1人きりの科学部、部長。
特に活動はしていないが、
将来薬学系に進むための
勉強部屋(部室)確保の為に
一応部長をやっている。
- ・ゆったりとした性格で見た目に
あまり頓着しないが、よく見ると
顔立ちは整っている。
- ・実は部室でオナニーもしている
ムッツリスケベ。
- ・お茶のブレンドが趣味。
- ・身長が低く、胸も小さい。

「これが部室にあった一番小さい
サイズの白衣なんだ。」

「まあ、大きい分には困らないし？」

「ゆっくりしていきなよ、後輩くん。」





冒頭シーンサンプル

眠りから覚める。

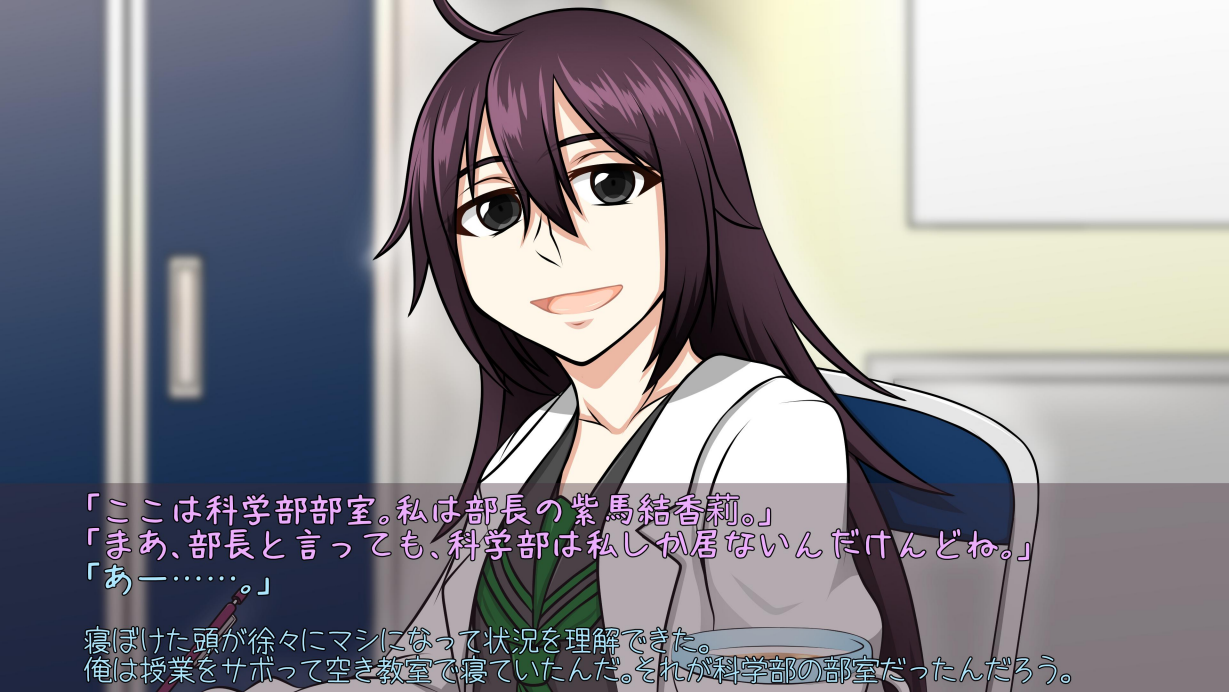
椅子で寝ていたせいか少し体が痛い。えっと、ここはどこだっけ？



「やあ、起きたかい？」

「ん……。あー誰？」

目を覚ますとそこには知らない女の子がいた。
制服の色から見るに先輩だとはわかるが、本当に先輩かと疑うくらい小柄だ。

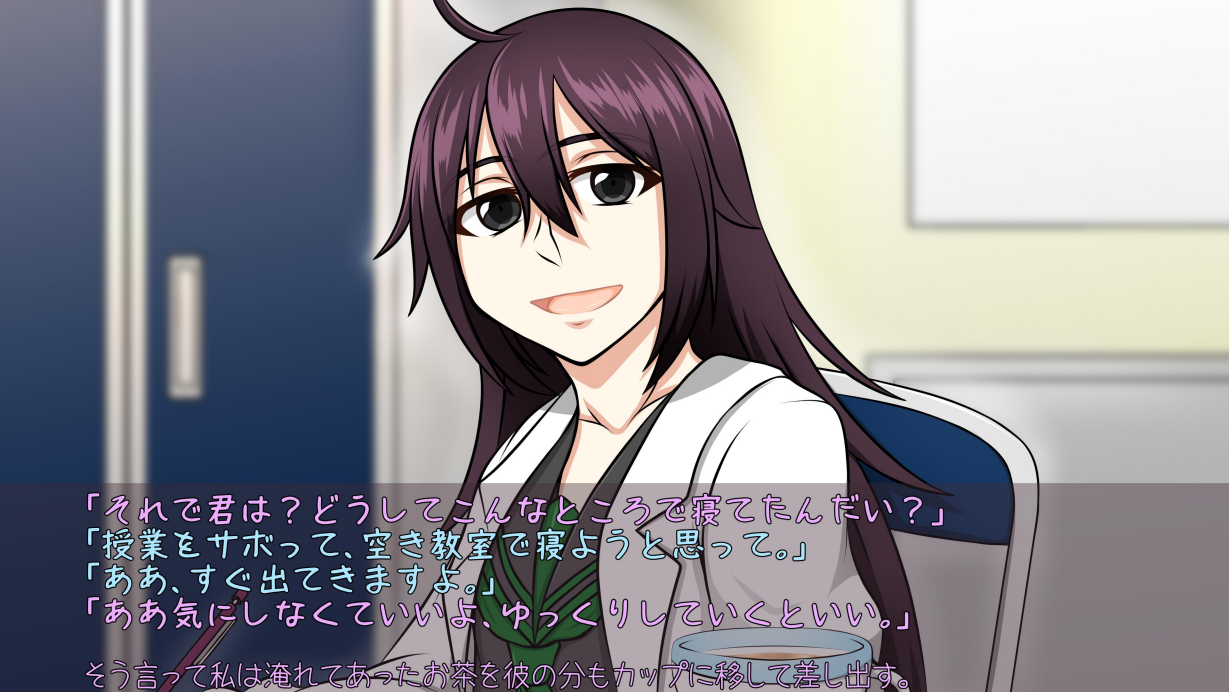


「ここは科学部部室。私は部長の紫馬結香莉。」

「まあ、部長と言っても、科学部は私しか居ないんだけんどね。」

「あー……。」

寝ぼけた頭が徐々にマシになって状況を理解できた。
俺は授業をサボって空き教室で寝ていたんだ。それが科学部の部室だったんだろう。



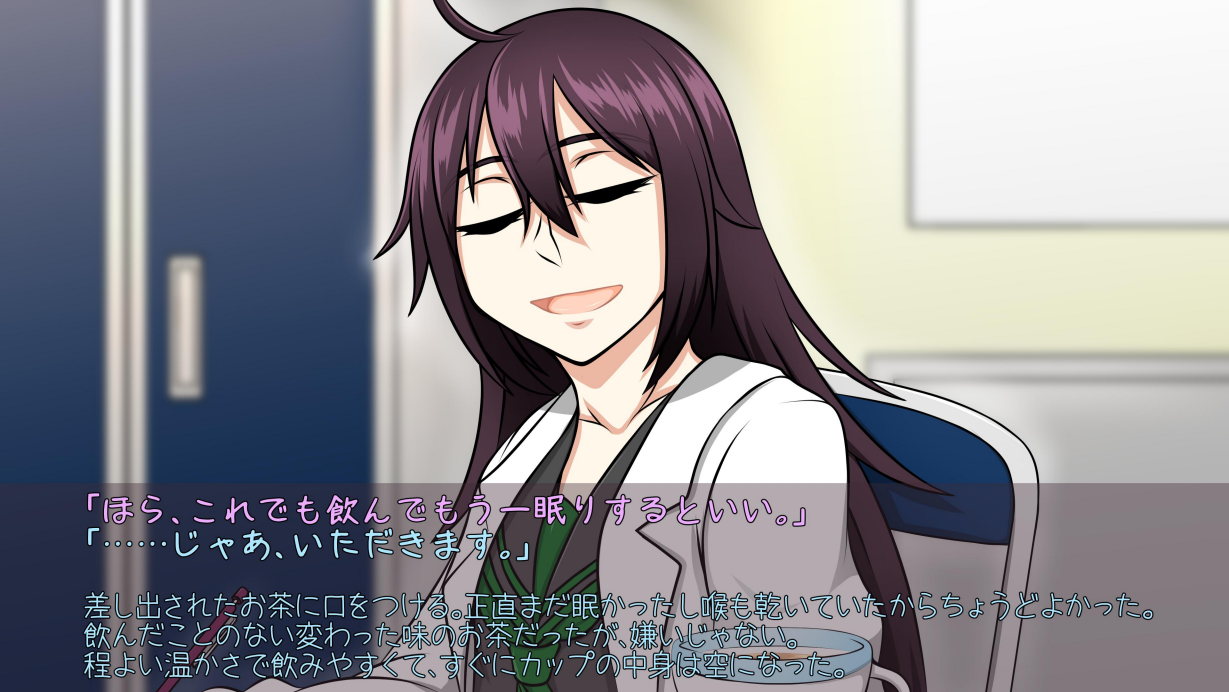
「それで君は？ どうしてこんなところで寝てたんだい？」

「授業をサボって、空き教室で寝ようと思って。」

「ああ、すぐ出てきますよ。」

「ああ気にしないでいいよ、ゆっくりしていくといい。」

そう言って私は淹れてあったお茶を彼の分もカップに移して差し出す。



「ほら、これでも飲んでもう一眠りするといい。」

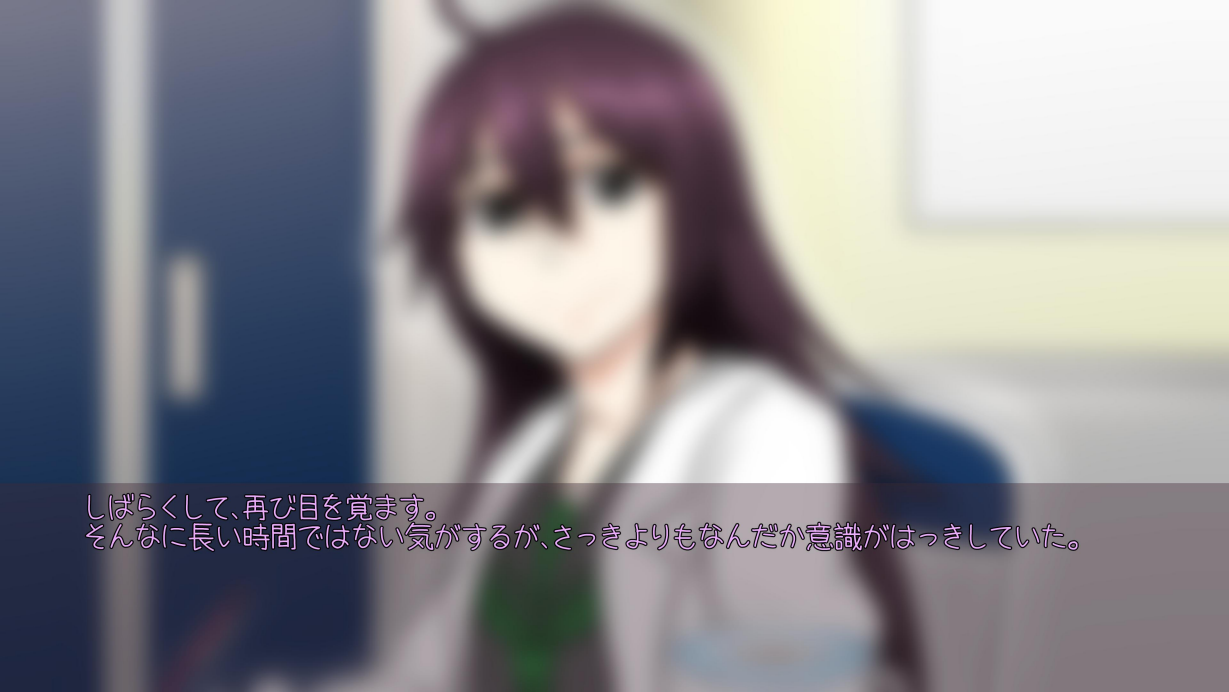
「……じゃあ、いただきます。」

差し出されたお茶に口をつける。正直まだ眠かったし喉も乾いていたからちょうどよかった。
飲んだことのない変わった味のお茶だったが、嫌いじゃない。
程よい温かさで飲みやすく、すぐにカップの中身は空になった。



「ふふ、お口にあった様で何より。ゆっくり休むといい。」
「じゃあ、お言葉に甘えて。」

そう言って彼はまた横になる。授業をサボって寝ていたわりには言葉遣いや所作が丁寧だ。
おそらく本来は真面目な子なのかも知れない。
……少しだけ罪悪感を感じながら彼を見守ることにした。



しばらくして、再び目を覚ます。
そんなに長い時間ではない気がするが、さっきよりもなんだか意識がはっきりしていた。



「おや、もう目が覚めたのかい？」
「ん、ああ。だいぶすっきりし、たかな。」

さっき寝ている間に確認もしたが、彼も違和感に気づいたみたいだ。
今頃彼のちん〇はズボンの中でギンギンになっていることだろう。
なにせ、私がさっきのお茶に一服持ったのだから。



「ずいぶん『元気』になった様だね。」
「なんだよ、なんか含みがあるな。」
「さっき寝ている間に確認したからね。」
「なっ！？おい！！」

ふふっなかなか良い反応だ。さて、彼を辱めててもいけない、ちゃんと説明してあげよう。



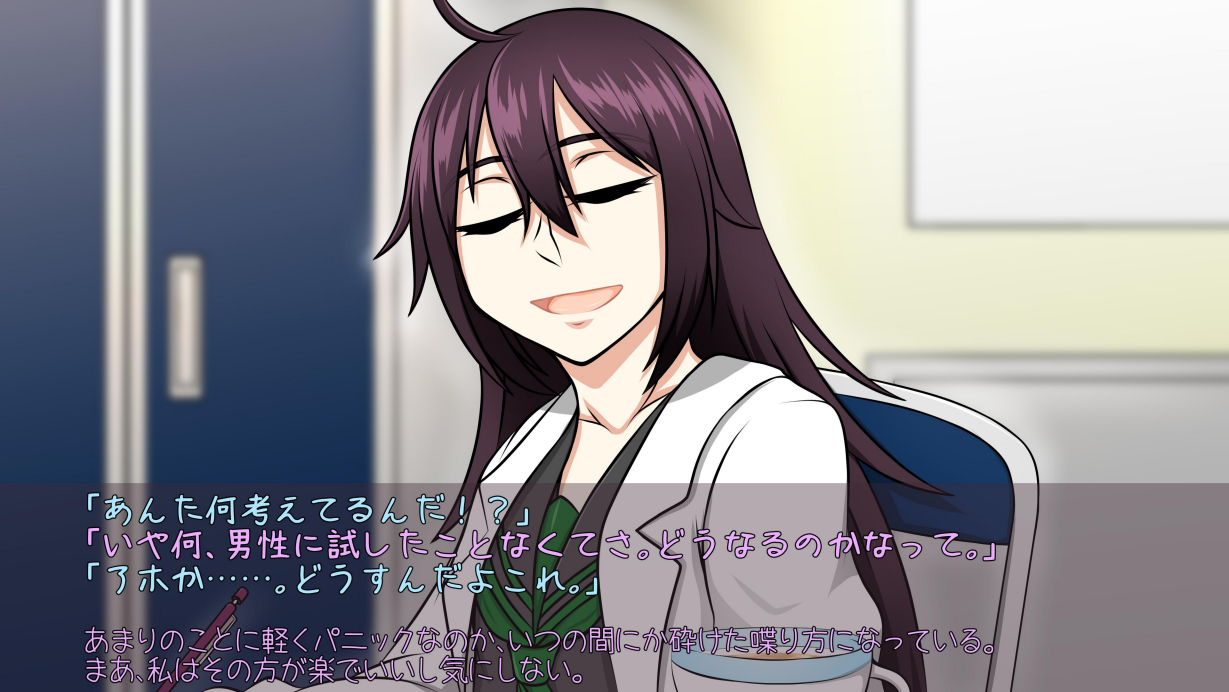
「何、恥ずかしがることじゃない。」

「私が一服盛ったんだから。」

「はあ!？」

「ああ、盛ったと言っても、医療用のものじゃないよ。」

先輩が楽しそうに話す。いや、医療用とかそう言うことじゃない、何を考えてるんだこの人は!?



「あんた何考えてるんだ!？」

「いや何、男性に試したことなくてさ。どうなるのかなって。」

「うホか……。どうすんだよこれ。」

あまりのことに軽くパニックなのか、いつの間にか砕けた喋り方になっている。
まあ、私はその方が楽でいいし気にしない。



「もちろん、責任は取るさ。」
「取るって、どうやって……。」
「私じゃ、不満かな？」
「は？おいそれって……。」

そう言って彼ににじり寄る。逃げようと思えばいくらでもできるだろうに、彼は逃げなかった。



Hシーンサンプル



「んああっ、くっああ♡あっ♡」

後輩くんに押し倒される。私の身体に対しては大きいちん○が一気に挿入された。
後輩くんのちん○は少し上に反っていて、私のお○んこの上を擦り上げてくる。
すっかり興奮してガツガツと突かれるが、私の身体はそれでも反応してしまい、
初めてだと言うのにすでに気持ち良くなっている。



「はぁっ、あぁっ！！」
「んっくっ♡うっんうっ♡」

興奮にして先輩を押し倒す。先輩の小さい体軀もあっていけない事をしているみたいだが、その罪悪感よりも、興奮が勝ってめちゃくちゃにちん〇を突き入れる。



「くうっ♡んっ♡んくう♡」
「はぁっ、はぁっ。うっぁぁっ」

激しくお○んこを突かれ、否応なしに気持ち良くなってしまう。
初めては痛い聞いていたけど、オナニーのしすぎか痛みはほとんどなく少しヒリヒリする位。
それ以上に激しく快感が押し寄せて、今にも言ってしまうそうだった。



「んっ♡あぁっ♡♡待って、もうっ♡」

待ってとは言ったけど、彼には届いていなさそうだな、それくらい興奮してくれているのは嬉しい。
しかし、私の体はそれを楽しむ余裕はなかった。

「まっ、ん♡んあぁっ♡♡♡」




「ん♡はぁ♡あ、はぁっ♡」
「ううっ、きつっ！！」

急にお〇んこがきつく締まる、先輩がイッたのかも知れない。
元々小さいお〇んこの締めりがキツくなったが、先輩のお〇んこは十分以上に濡れていて、
動きやすさはそのままもっと気持ち良くなっていた。



「はぁっ♡♡あ♡んあぁっ♡」

先輩のお〇んこはさっきから小刻みにキュッキュッと締め付けてくる。
先輩自体は息も余裕もなく息を切らすように喘ぎ声が漏れて
とにかく感じまくっている様だった。



後輩くんの上反りちん〇に擦り上げられて腰が自然に持ち上がる。
彼のが大きいのか私のが小さいのか簡単に奥まで届いてしまう。

「ああっ♡奥っ、あっ♡んああっ♡♡」
「先輩、先輩っ」



「んあぁっ♡はげしっあぁ♡あぁっ♡」

後輩くんの動きがさらに激しくなり、突き方も小刻みに何度も打ち付けるような動きへと変わる。もうすぐイクんだろうか？私はもうさっきから何度も軽くイッていたが、後輩くんがイキそうなら少し耐えて思いっきりイクとしよう。




「先輩、俺もう、イキそうっ！！」
「く、くうっ♡んん♡良い、ぞ♡、んう♡」

どんどん気持ち良くなる先輩のお○んこに、さっきからずっと我慢していたが、もう限界だった。
俺はイキそうだと先輩に伝えて最後の追い込みにと腰の動きを早めた。




「ああ、イツくう、先輩、イクっ!!!」
「んっああっ♡あ、ああっ♡き、ああっ♡」



「ああっイっくっ!!!」
「んああっ♡ああああああああっああ♡♡♡」

後輩くんが思いっきり腰を打ちつけて射精する。
それに合わせて私も思いっきりイッてしまった。



「んっ♡はぁ……んはぁ♡はぁ……。」
「はぁ、はぁ……。」

射精するまでも射精するときも、今までで一番気持ちいい射精だった。
これだけ気持ちいい射精をしたと言うのに、俺のちん〇はまだまだ硬いままだった。
先輩には悪いが、責任を取ると言った以上、付き合ってもらおう。



恋の

一步は

から

紫馬 結香莉の場合



恋の一步は
から

紫馬 結香莉の場合